

VILLAGE Historia

～東秩父村にかかわる歴史をマルッと紹介～

戦争と村

今回ご紹介するのは「戦争と村」。3月19日（火）に平成30年度戦没者追悼式が埼玉中央農業協同組合東秩父支店2階でしめやかに営まれました。この式典は、西南戦争以降に出兵され亡くなられた223柱の御霊を追悼するため、ご遺族の方、関係各位が出席し、献花を行うものです。

一．日中戦争以降の出征

昭和12年7月、日本は「日中戦争」へと突入しました。東秩父村は、その頃はまだ前身の大河原

村と槻川村であり、両村で多くの村民が兵士

として戦場へ赴きました。大河原地区は474人、槻川地区は531人が出征しています。これは、当時の世帯数で見ると、約1世帯に1人は出征されたようです。一方、戦没者は大河原地区で101人、槻川地区で106人にもおよび、出征者の約5人に1人

は亡くなってしまいました。

また、本村ならではの出征の例として、出征者の中には紙漉きの産業戦士として南方へ派遣された方もいました。

二．製紙業と戦争

本村の産業のかなめだった「製紙業」は、戦争の際に需要が拡大しました。しかし、それは「軍需用紙」としての需要であり、和紙生産より優先的に生産されていました。第二次世界大戦では「風船爆弾」に用いる気球紙を供給するため地域をあげて生産体制に入ったそうです。

三．村の子どもの生活

戦争中、子どもたちは出征兵士の留守宅の農作業等、勤労奉仕をしたり、警戒報・空襲警戒報に恐れたり、応召者の歓送・英霊の出向え、神社参拝など、勉

強どころではなく、満身に勉強ができませんでした。

現在、日本では戦争を知らない人たちがほとんどとなってしまいました。しかし、多くのかげがえのないものを奪い、悲しみを残した戦争は、決して薄れさせてはいけない「記憶」です。そして二度と繰り返してはいけません。「記憶」が「記録」に完全に変わるとき、私たちが守るべきものを見失わないようにしましょう。



▲本村の戦争中の様子